

2024年度 介護福祉専攻科

授 業 概 要

学校法人 昌賢学園
群馬社会福祉専門学校

介護福祉専攻科 開講科目

科 目	単位	種類
社会の理解/人間の理解	2	講義
介護の基本A	4	講義
介護の基本B	4	講義
介護の基本C①	2	講義
介護の基本C②	2	講義
コミュニケーション技術	4	講義
生活支援技術A	4	演習
生活支援技術B	4	演習
生活支援技術C	4	演習
生活支援技術D	4	演習
生活支援技術E	4	演習
生活支援技術F	2	講義
介護過程Ⅰ	4	講義
介護過程Ⅱ	4	講義
介護過程Ⅲ	2	講義
介護総合演習	4	演習
介護実習Ⅰ	4	実習
介護実習Ⅱ	4	実習
発達と老化の理解	2	講義
認知症の理解	4	講義
障害の理解	2	講義
こころとからだのしくみ	4	講義
医療的ケアⅠ	3	講義
医療的ケアⅡ	2	演習

授 業 概 要

授業のタイトル (教科名) 社会の理解		授業の種類 講 義		授業担当者 齋藤 至孝	
授業の回数 8回	時間数(単位数) 15(1)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・後期	必修・選択 必 修		
<p>実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>知的障害者施設(就労支援施設)で生活支援員として7年、介護老人保健施設の支援相談員として8年の実務経験を活かし、実際の現場でのエピソードを交えながら、将来介護職についたときに役立つ内容の講義を行い、各自のイメージアップにつなげる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>保育士養成課程で学んだ内容を踏まえて、高齢者福祉、障害者福祉及び権利擁護等の制度・施策について、介護実践に必要な観点から、基礎的な知識を習得する学習とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>テキスト「人間の尊厳と自立／社会の理解」を基に講義形式とする。また適宜詳細な資料やVTR教材等も活用し、難しいと思われがちな内容を、理解しやすく解説していく。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>日本の社会保障制度と介護保険制度の目的と仕組みについて理解し、高齢者、障害者を支援する諸制度を実践力として身に付ける。法制度を単なる知識の習得ではなく、介護現場で役立つ根拠として理解できるようになる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「ライフスタイルの変化、家族の機能と役割」について解説する【講義】 2. 「社会・組織の役割と機能、地域社会における生活支援」について解説する【講義】 3. 「地域共生社会、地域包括ケア」について解説する【講義】 4. 「日本の社会保障制度のしくみ、現代社会と社会保障制度」について解説する【講義】 5. 「高齢者福祉に関連する法体系、介護保険制度」について解説する【講義】 6. 「障害者保健福祉の動向、障害者総合支援制度」について解説する【講義】 7. 「個人の権利を守る制度、保険医療に関する制度」について解説する【講義】 8. まとめと解説 					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>日本介護福祉士養成施設協会、田中博一・小坂淳子著 (2014)『介護福祉士養成テキスト1人間の尊厳と自立／社会の理解』 (その他、適宜資料を配布・紹介)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>出席・授業態度30% 試験(小テスト含)70%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル（教科名） 人間の理解		授業の種類 講 義		授業担当者 齋藤 至孝
授業の回数 8回	時間数(単位数) 15(1)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・後期	必修・選択 必 修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 知的障害者施設（就労支援施設）で生活支援員として7年、介護老人保健施設の支援相談員として8年の実務経験を活かし、実際の現場でのエピソードを交えながら、将来介護職についたときに役立つ内容の講義を行い、各自のイメージアップにつなげる。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい] 福祉の理念を理解し、尊厳の保持や権利擁護の視点及び専門職としての基盤となる倫理観を養う。 対象者の生活を地域の中で支えていく観点から、地域社会における生活とその支援についての基礎的な知識を身につける。</p> <p>[授業全体の内容の概要] テキスト「人間の尊厳と自立／社会の理解」を基に講義形式とする。また適宜詳細な資料やVTR教材等も活用し、難しいと思われがちな内容を、理解しやすく解説していく。</p> <p>[授業修了時の達成課題（到達目標）] 人間理解の重要性を基盤に、その意義について正しく理解し、実際の介護場面における個々の尊厳の保持と自立支援の実践について、共通した重要視点を持てるようになり、その背景や論拠についても揺るがない倫理観と専門性を身につけることを目標とする。</p>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「人間理解と尊厳」について解説する【講義】 2. 「人間の多面的理解」について解説する【講義】 3. 「人間の尊厳」について解説する【講義】 4. 「介護における尊厳の保持」について解説する【講義】 5. 「介護と自立・自律」について解説する【講義】 6. 「社会福祉制度における自立」について解説する【講義】 7. 「人間の尊厳と自立の実践者」について解説する【講義】 8. まとめと解説 				
<p>[履修に当たっての留意点] 毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>				
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、田中博一・小坂淳子著 (2014) 『介護福祉士養成テキスト1 人間の尊厳と自立／社会の理解』 (その他、適宜資料を配布・紹介)</p>		<p>[単位認定の方法及び基準] 出席・授業態度 30% 試験(小テスト含) 70%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(科目名) 介護の基本A	授業の種類 講 義	授業担当者 山浦 あゆみ	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 介護福祉専攻科・通年	必修・選択 必 修
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）</p> <p>看護師という医療職の立場から、現在の地域包括ケアシステムに至るまでの歴史と、介護福祉士の役割と医療職との連携と協働の方法を教授する。</p>			
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>介護を必要とする人の尊厳ある生活を支援する専門職として、基本となる考え方(理念・機能・倫理・生活を支えるしくみ・多職種との連携と機能等)を学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護の社会化の背景や、超高齢社会を担う専門職として介護福祉士に求められる社会的役割を理解できる。 ・介護福祉士および介護福祉士法誕生の背景が理解でき、専門職としての義務と責任が持てる。 ・多職種および地域との連携方法を理解できる。 ・介護福祉の専門性と倫理を理解し、専門職としての態度を身に着ける。 			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護福祉士の仕事－①求められる介護福祉士像、社会福祉士及び介護福祉士法第2条2項における仕事内容 2. 介護福祉士の仕事－②介護福祉士の行う医療的ケアの内容、医師法第17条の解釈の内容（その1） 3. 介護福祉士の仕事－③医師法第17条の解釈について（その2）令和5年1月追加、現在のグレーゾーンの範疇とは 4. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－①社会福祉士及び介護福祉士法と内容（定義、義務規定、罰則、名称独占、登録のしくみ等） 5. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－②社会福祉士及び介護福祉士法と内容（定義、義務規定、罰則、名称独占、登録のしくみ等） 6. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－③社会福祉士及び介護福祉士法と内容（定義、義務規定、罰則、名称独占、登録のしくみ等） 7. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－④介護福祉士の機能（介護人材の中核となるリーダーとしての役割、介護人材のキャリアパス、教育研修体制、生涯教育体制 8. 介護福祉士の役割と活動の場－地域共生社会と介護福祉士の役割。災害と介護福祉士の役割 9. 介護福祉士の成り立ち－①介護の歴史、老人福祉制度による介護の新たな展開 10. 介護福祉士の成り立ち－②社会の変化、女性の社会進出、医療の進歩など 11. 介護福祉士の成り立ち－③介護問題の背景：長寿社会の現状、介護ニーズの変化 12. 介護福祉士の成り立ち－④介護問題の背景：疾病構造の変化、公衆衛生の整備 13. 介護福祉士を取り巻く状況－介護問題の背景：高齢者虐待、老老介護、高齢者の自殺 14. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－①介護福祉士の専門性と専門職能団体とは 15. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－②介護の専門職能団体である介護福祉士会 			

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

16. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－③(倫理とは、倫理判断)
17. 介護福祉士の役割と機能を支えるしくみ－④(介護福祉士会の倫理綱領)
18. 介護実践における連携－①多職種理解 (協働する職種の種類と機能と理解)
19. 介護実践における連携－②多職種連携 (チームアプローチ) の必要性
20. 介護実践における連携－③多職種連携 (チームアプローチ) における介護福祉士の役割
21. 介護実践における連携－④多職種連携 (チームアプローチ) の具体的事例
22. 介護実践における連携－⑤地域連携 (チームアプローチ) 地域連携の意義と目的
23. 介護実践における連携－⑥地域連携 (チームアプローチ) 地域連携にかかわる機関の機能と役割
24. 介護実践における連携－⑦地域連携 (チームアプローチ) における介護福祉士の役割
25. 介護実践における連携－⑧地域連携 (チームアプローチ) の具体的事例
26. 介護を必要とする人の理解－① その人らしさ (価値観とは、生活歴)
27. 介護を必要とする人の理解－② 高齢者の暮らし、生活環境、住まいと環境
28. 介護を必要とする人の理解－③ 生活習慣と生活様式、生活のリズム
29. 介護を必要とする人の理解－④ 余暇活動、レクリエーション、家族の役割
30. まとめと解説

[履修に当たっての留意点]

介護福祉士としての心構えや、介護に関する基礎的な知識習得の科目であり、他科目とも連動していくため、講義後には復習をおこなうこと。

[使用テキスト・参考文献]

パワーポイント資料
日本介護福祉士養成施設協会・川井太加子・野中ますみ著 (2014)『介護福祉士養成テキスト2介護の基本/介護過程』法律文化社
(資料授業中に紹介、配布)

[単位認定の方法及び基準]

筆記試験80%
授業態度10%
授業ごとのプレテスト10% 等総合的判断

授 業 概 要

授業のタイトル（教科名） 介護の基本B	授業の種類 講 義	授業担当者 山浦 あゆみ	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60時間（4）	配当学年・時期 介護福祉専攻科・通年	必修・選択 必 修
実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性)			
看護師という医療職の立場から、介護福祉士の役割と医療職との連携と協働の方法を教授する。			
[授業の目的・ねらい] 介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う。			
[授業全体の内容の概要] ① 「尊厳の保持」、「自立支援」についての学習、介護を必要とする人の生活を支える意義や実践について自分たちの生活に照らし合わせて考えていく。 ② 介護を必要とする人の生活の個別性に対応するために、生活の多様性や社会とのかかわりを理解する。 ③介護を必要とする人の生活を支援するという観点から、介護サービスや地域連携等、フォーマル・インフォーマルな支援を理解する内容とする。			
[授業修了時の達成課題（到達目標）] ・尊厳の保持や自立支援という介護福祉の基本となる理念を理解する内容とする。 ・介護の基本理念としての「自立支援」の考え方と具体的な展開について理解でき、介護実習の場面に繋げることができる。 ・「個別ケア」、「自己決定」、「生活の質」について、介護実践（支援技術の演習、介護実習、就職後）に活かすことができる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. 尊厳を支える介護－①（人間の尊厳とは、尊厳と基本的人権） 2. 尊厳を支える介護－②（利用者主体、主体的尊重、選択の尊重） 3. 尊厳を支える介護－③（自己実現、マズローの考え方から） 4. 尊厳を支える介護－④（ノーマライゼーションの考え方） 5. 自立支援の理念、自立とは何か。（エンパワメントとは、人間の尊厳と自立にかかわる法律とは） 6. 自立支援の具体的展開（QOLの向上とリハビリテーション、これからの介護予防、身体介護における「自立生活支援のための見守りの援助」、社会生活力（SFA） 7. 個別ケアの考え方（ICFの視点に基づくアセスメントを理解する。） 8. 個別ケアの展開（介護の場面で利用されるICFの例） 9. 在宅における介護福祉－①（訪問介護、居宅介護） 10. 在宅における介護福祉－②デイサービス（通所介護）・デイケアサービス（通所リハ） 11. 在宅における介護福祉－③グループホーム、ショートステイ、小規模多機能サービス他 12. 施設における介護福祉－①特別養護老人ホームの目的・介護の視点、ユニットケア 13. 施設における介護福祉－②介護老人保健施設および介護療養型医療施設における介護の視点 14. 施設における介護福祉－③障害者福祉施設における介護の視点 15. 施設における介護福祉－④その他の施設における介護の視点			

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

16. 地域連携における介護福祉－①地域連携の意義と目的
17. 地域連携における介護福祉－②連携におけるインフォーマルサービス
18. 地域連携における介護福祉－③地域連携にかかわる職種
19. 地域連携における介護福祉－④地域包括支援センターの機能と役割
20. 地域連携における介護福祉－⑤市区町村、都道府県の機能と役割、連携
22. データを読む①：厚生労働省データ 『国民生活基礎調査の概況』（大規模調査年、通常年）
23. データを読む②：厚生労働省データ 『高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果』
24. データを読む③：厚生労働省データ 『身体拘束ゼロへの手引き』『介護保険指定基準』
25. データを読む④：厚生労働省データ 『我が国の人口動態』
26. データを読む⑤：内閣府データ 『高齢社会白書』
27. データを読む⑥：内閣府データ 『一人暮らし高齢者に関する意識調査結果』『高齢者の不慮の事故』
28. データを読む⑦：内閣府データ 『高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果』
29. データを読む⑧：育児休暇、介護休暇、EPAのしくみと外国人の介護就労について（4コース）
30. まとめと解説

[履修に当たっての留意点]

介護福祉士としての心構えや、介護に関する基礎的な知識習得の科目のため、他科目とも連動していくため、講義後には復習をおこなうこと。

[使用テキスト・参考文献]

パワーポイント資料
日本介護福祉士養成施設協会・川井太加子・野中ますみ著（2014）『介護福祉士養成テキスト2介護の基本/介護過程』 法律文化社
（資料授業中に紹介、配布）

[単位認定の方法及び基準]

筆記試験 80%
授業態度 10%
授業ごとのプレテスト 10% 等総合的判断

授 業 概 要

授業のタイトル (教科名) 介護の基本C①		授業の種類 講 義		授業担当者 山浦 あゆみ	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間 (2)	配当学年・時期 介護福祉専攻科・前期		必修・選択 必 修	
実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性) 医療職の立場から、対象者および介護福祉士自身の健康と安全についての考え方を教授する。					
[授業の目的・ねらい] 介護福祉の基本となる理念や、地域を基盤とした生活の継続性を支援するためのしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を養う。					
[授業全体の内容の概要] ① 利用者の生活の安全を守る基礎的な知識と役割を学び、利用者や家族の安全の実現には介護従事者自らの健康管理や安全の保証が必要であることの認識を深め、演習・実習、ひいては職場にて実践できるようになることを目標とする。 ② 「介護を必要とする人」が、安全な暮らしができるための安全の確保とリスクマネジメントの必要性が理解できる。 ③介護従事者自身の健康管理不足や不注意から、介護事故やヒヤリハットにつながることを理解でき、心身ともに健康に介護を実践するための健康管理や労働環境の管理について理解する。 ④安全に関する理念や理論、知識を学ぶことで、他科目の生活支援技術・介護過程・介護総合演習・介護実習に反映させることができる。					
[授業修了時の達成課題 (到達目標)] ・安全の概念を予防・自立の点から理解できる。 ・現場における緊急対応の方法、災害時の役割を認識することができる。 ・自らの安全や健康管理を守るための知識を身に付ける。					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. 介護における安全の確保とリスクマネジメントー①介護領域におけるリスクマネジメント (ヒヤリハット、ハインリッヒの法則、フェールセーフの考え方) 2. 介護における安全の確保とリスクマネジメントー②在宅における介護事故 3. 介護における安全の確保とリスクマネジメントー③感染症の予防と管理 (基礎知識) 4. グループで感染症予防のための演習 (手袋・マスクの装着、ガウンの装着、滅菌撮子と綿球の取り扱い) 5. 介護における安全の確保とリスクマネジメントー④感染症の予防と管理 (各論) 6. 介護事故 (事例を提示しながら説明) 7. 介護事故予防と安心安全な介護 (事例を提示しながら説明)、個人情報保護法 8. 介護従事者の安全ー①介護従事者の健康問題 (腰痛)、新しい腰痛対策 9. 介護従事者の安全ー②体の健康管理 (感染、疲労、頸肩腕障害、深夜業) 10. 介護従事者の安全ー③心の健康管理(燃え尽き症候群、感情労働、ストレス、うつ病、看取りにかかわる介護職員の心のケア) 11. 介護従事者の安全ー④労働の環境 (快適な職場の重要性、労働基準法と変更点、安全衛生法) 12. 身体拘束と虐待ー①身体拘束 13. 身体拘束と虐待ー②高齢者虐待の現状と課題 14. 身体拘束と虐待ー③虐待を起こさないために 15. まとめと解説					
[履修に当たっての留意点] 介護福祉士としての心構えや、介護に関する基礎的な知識習得の科目のため、他科目とも連動していくため。講義後には復習をおこなうこと。					
[使用テキスト・参考文献] パワーポイント資料 日本介護福祉士養成施設協会・川井太加子・野中ますみ著 (2014) 『介護福祉士養成テキスト2介護の基本/介護過程』法律文化社 (資料授業中に紹介、配布)			[単位認定の方法及び基準] 筆記試験 80% 授業態度 10% 授業ごとのプレテスト 10% 等総合的判断		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 介護の基本C②		授業の種類 講 義		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期	必修・選択 必 修		
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 介護施設における介護福祉士としての実務経験をもとに、介護保険制度のしくみや要介護認定に至るまでの流れを、演習やグループ活動を通して学び合える授業としたい。					
[授業の目的・ねらい] 介護福祉士として、他職種との協働やケアマネジメントなどのしくみを理解し、介護保険制度下における具体的な事例について支援を展開できる能力を養う。					
[授業全体の内容の概要] 介護を必要とする人の理解を深め、人間の多様性及び高齢者の暮らしの実際をグループワークなどを通して考える。常に、生活者としての観点から、介護福祉士としての知識を習得していくことを目標とする。					
[授業修了時の達成課題(到達目標)] 介護保険制度を理解し、地域福祉に寄与できる専門性が身につく。介護福祉士として他職種との良好な連携を保つためにも、学習成果をプレゼンテーションできるようになる。					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護保険制度のあらましを概説する(講義、動画教材視聴) 2. 要介護認定からサービス利用までの流れを説明する(講義) 3. 介護サービス提供の特性と流れについて解説する。(講義) 4. 「介護保険制度を理解しよう」(グループワークの成果発表の準備①) 5. 「介護保険制度を理解しよう」(グループワークの成果発表の準備②) 6. 「介護保険制度を理解しよう」(グループ発表) 7. 「介護保険制度を理解しよう」(総括、講義、動画を活用し、復習を図る) 8. 職務の理解について説明する(職種編…講義・動画教材視聴) 9. 介護保険制度に基づく介護サービス提供のまとめ①(講義、小テスト①) 10. 介護保険制度に基づく介護サービス提供のまとめ②(講義、小テスト①の振り返り) 11. 介護保険制度に基づく介護サービス提供のまとめ③(講義、小テスト②) 12. 介護保険制度に基づく介護サービス提供のまとめ④(講義、小テスト②の振り返り) 13. 介護保険制度に基づく介護サービス提供のまとめ⑤(講義、小テスト③) 14. 介護保険制度に基づく介護サービス提供のまとめ⑥(講義、小テスト③の振り返り) 15. 全体総括、定期試験(講義、動画教材視聴) 					
[履修に当たっての留意点] 授業はグループワークが中心になるため、活動成果を上げるためにも毎回の出席が求められる。学びの共有化を図りながら、介護保険制度の理解を深めていきたい。					
[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、川井太加子・野中ますみ著(2014)「介護福祉士養成テキスト 2 介護の基本/介護過程」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)			[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) ①筆記試験50% ②グループワーク、小テスト30% ③授業態度20%		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) コミュニケーション技術		授業の種類 講義		授業担当者 齋藤 至孝
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・前期	必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 知的障害者施設(就労支援施設)で生活支援員として7年、介護老人保健施設の支援相談員として8年の実務経験を活かし、実際の現場でのエピソードを交えながら、将来介護職についたときに役立つ内容の講義を行い、各自のイメージアップにつなげる。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい] 介護職という対人援助技術者として、コミュニケーション技法の意義・効果について理解する。また、その技術を活用し、利用者・家族及び関係する多職種等とのコミュニケーションが実践できる力を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] コミュニケーションの基本的理解、自己覚知、傾聴、受容、共感を踏まえ、テキスト内外の事例や演習、動画視聴等を通じ、利用者・家族とのコミュニケーション、場面を想定したコミュニケーション技法を、介護の専門職を意識して学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 介護福祉士取得を前提とし、コミュニケーションの各技法を理解し、実践できるようになる。</p>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「介護におけるコミュニケーションの基礎・目的」について解説する【講義】 2. 「介護におけるコミュニケーションのしくみ」について解説する【講義】 3. 「介護におけるコミュニケーションの実際」について解説する【講義】 4. 「介護におけるグループでのコミュニケーション」について解説する【講義】 5. 「認知症の人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 6. 「視覚障害のある人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 7. 「聴覚障害のある人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 8. 「失語症の人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 9. 「精神障害のある人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 10. 「知的障害のある人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 11. 「高次脳機能障害のある人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 12. 「福祉用具を用いたコミュニケーション」について解説する【講義】 13. 「多職種連携に必要なコミュニケーション・記録」について解説する【講義】 14. 「多職種連携に必要なコミュニケーション、報告・会議」について解説する【講義】 15. 前期のまとめ 				
<p>[履修に当たっての留意点] 毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>				
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著(2014)『介護福祉士養成テキスト3 コミュニケーション技術/生活支援技術Ⅰ・Ⅱ』 (その他、適宜資料を配布・紹介)</p>		<p>[単位認定の方法及び基準] 出席・授業態度 30% 試験(小テスト含) 70%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) コミュニケーション技術		授業の種類 講義		授業担当者 秋山	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・後期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 知的障害者施設(就労支援施設)で生活支援員として7年、介護老人保健施設の支援相談員として8年の実務経験を活かし、実際の現場でのエピソードを交えながら、将来介護職についたときに役立つ内容の講義や演習を行い、各自のイメージアップにつなげる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 介護職という対人援助技術者として、コミュニケーション技法の意義・効果について理解する。また、その技術を活用し、利用者・家族及び関係する多職種等とのコミュニケーションが実践できる力を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] コミュニケーションの基本的理解、自己覚知、傾聴、受容、共感を踏まえ、テキスト内外の事例や演習、動画視聴等を通じ、利用者・家族とのコミュニケーション、場面を想定したコミュニケーション技法を、介護の専門職を意識して学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 介護福祉士取得を前提とし、コミュニケーションの各技法を理解し、実践できるようになる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 「話を聴く技法」について解説する【講義】 17. 「利用者の感情表現を察する技法」について解説する【講義】 18. 「利用者の納得と同意を得る技法」について解説する【講義】 19. 「質問の技法」について解説する【講義】 20. 「相談・助言・指導の技法」について解説する【講義】 21. 「利用者の意欲を引き出す技法」について解説する【講義】 22. 「利用者と家族の意向を調整する技法」について解説する【講義】 23. 「複数の利用者がある場面でのコミュニケーション技法」について解説する【講義】 24. 「コミュニケーション障害とその原因」について解説する【講義】 25. 「コミュニケーション障害を理解する視点」について解説する【講義】 26. 「コミュニケーション障害のある利用者を支えるコミュニケーション技術」について解説する【講義】 27. 「コミュニケーション障害の状態の観察・情報収集する技術」について解説する【講義】 28. 「コミュニケーション障害の傾向を分析・解釈・アセスメントする技術」について解説する【講義】 29. 「コミュニケーションの方法を立案・実践する技術」について解説する【講義】 30. 後期のまとめ 					
<p>[履修に当たっての留意点] 毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著（2014）『介護福祉士養成テキスト3コミュニケーション技術／生活支援技術Ⅰ・Ⅱ』 (その他, 適宜資料を配布・紹介)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 出席・授業態度 30% 試験(小テスト含) 70%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術A		授業の種類 演習	授業担当者 平石 仁恵
授業の回数 30	時間数(単位数) 60 (4)	配当学年・時期 介護福祉専攻科 前期	必修・選択 必修
実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性) 障がい者の地域生活支援を担当していた経験から、生活支援における食生活の重要性について学んだことを、講義中に伝えている。食を通じての健康保持、よりよい食生活支援のあり方を考えたい。			
[授業の目的・ねらい] 高齢者には長い人生の中で培ってきた食習慣や嗜好、価値観などがある。尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。障がい者には、障害の違いにより食への対応が異なる。それらを尊重した支援をするための基礎的な知識と調理技術を習得する。			
[授業全体の内容の概要] 高齢者や障がい者にとっての様々な生活場面を想定し、講義と講義内容に呼応した料理を調理する。 * 本科目は調理実習が予定されていますが、コロナウィルスやインフルエンザ等の感染症の状況により、講義内容や実習時期を変更する可能性があります。夏季には実習を控えます。			
[授業修了時の達成課題(到達目標)] ・高齢者や障がい者の調理支援に関する基礎的知識を理解することができる。 ・対象者の特性に合わせた献立作成、食材や調理法の決定及び調理ができる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] 1. オリエンテーション 講義の進め方、課題、評価方法について説明する(講義)。 2. 調理支援のための基礎知識について解説する(講義)。学生によるプレゼンテーション(発表)。 3. 調理支援と家庭生活について解説する。実習レシピ解説(講義)。学生によるプレゼン(発表) 4. 春のおやつ、調理と試食(実習)。 5. 調理支援と物理的環境について解説する(講義)。(講義)。学生プレゼン(発表) 6. 軟菜食の調理と試食(実習)。 7. 調理の基本について解説する。(講義)。学生によるプレゼンテーション(発表)。 8. きざみ食の調理と試食(実習)。 9. 介護現場での食生活支援と課題について解説する(講義)。学生によるプレゼンテーション(発表)。 10. 夏のおやつ、調理と試食(実習)。 11. 介護食の調理について解説する。実習レシピ解説(講義)。学生によるプレゼンテーション(発表)。 12. ゼリー食の調理と試食(実習)。 13. 和食調理の基本について解説する(講義)。学生によるプレゼンテーション(発表)。 14. 和食献立の調理と試食(実習)。 15. まとめと解説。			
[履修に当たっての留意点] ・調理実習時にはガイダンスに従い、身支度を整えること。 ・実習の手順書を事前に読んで実習に臨むこと。実習後に、自宅で再度調理することを勧める。			
[使用テキスト・参考文献] 田崎 裕美 他、(2023年)『生活支援のための調理実習』 建帛社		[単位認定の方法及び基準] 筆記試験 50% 課題発表・実習態度 50%	

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術A		授業の種類 演習	授業担当者 平石 仁恵
授業の回数 30	時間数(単位数) 60 (4)	配当学年・時期 介護福祉専攻科 後期	必修・選択 必修
実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性) 障がい者の地域生活支援を担当していた経験から、生活支援における食生活の重要性について学んだことを、講義中に伝えている。食を通じての健康保持、よりよい食生活支援のあり方を考えたい。			
[授業の目的・ねらい] 高齢者には長い人生の中で培ってきた食習慣や嗜好、価値観などがある。尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。障がい者には、障害の違いにより食への対応が異なる。それらを尊重した支援をするための基礎的な知識と調理技術を習得する。			
[授業全体の内容の概要] 高齢者や障がい者にとっての様々な生活場面を想定し、講義と講義内容に呼応した料理を調理する。 * 本科目は調理実習が予定されていますが、コロナウィルスやインフルエンザ等の感染症の状況により、講義内容や実習時期を変更する可能性があります。夏季には実習を控えます。			
[授業修了時の達成課題(到達目標)] ・高齢者や障がい者の調理支援に関する基礎的知識を理解することができる。 ・対象者の特性に合わせた献立作成、食材や調理法の決定及び調理ができる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] 16. 洋風調理の基本、後期課題発表について説明、実習レシピの解説(講義)。 17. 洋風献立の調理と試食(実習)。 18. 在宅介護、施設介護における調理支援、実習レシピの解説(講義)。課題発表。 19. 秋のおやつ、調理と試食(実習)。 20. 障害に配慮した調理支援について解説する。実習レシピの解説(講義)。課題発表。 21. 介護食として提供しやすい献立、調理と試食(実習)。 22. 家庭にある食材を使った調理について解説する。実習レシピ作成(演習)。課題発表。 23. フードロスを意識した料理、調理と試食(実習)。 24. 高齢者の疾病と調理について解説する。実習レシピの解説(講義)。課題発表。 25. 冬のおやつ、調理と試食(実習)。 26. コントロール食について解説する。実習レシピの解説(講義)。課題発表。 27. カルシウム強化食の調理と試食(実習)。 28. 災害時の食事について解説する。実習レシピの解説(講義)。課題発表。 29. 災害時に応用可能な調理と試食(実習)。 30. まとめと解説。			
[履修に当たっての留意点] ・調理実習時にはガイダンスに従い、身支度を整えること。 ・実習の手順書を事前に読んで実習に臨むこと。実習後に、自宅で再度調理することを勧める。			
[使用テキスト・参考文献] 田崎 裕美 他、(2023年)『生活支援のための調理実習』 建帛社		[単位認定の方法及び基準] 筆記試験 50% 課題発表・実習態度 50%	

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術B		授業の種類 演習		授業担当者 山岸 裕美子	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・通年	必修・選択 必修		
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>介護福祉士は福祉利用者に対する日常生活支援のプロフェッショナルである。そのスペシャリストとしての能力を身につけるために家庭生活や日常生活の本質を理解し、生活事象の原理原則を知る。さらに、日本の自然を背景とする「生活文化」についての知識も獲得し、支援に活かせるようになる。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>衣・食・住・家庭管理について「生活を科学する」をモットーに、学際的な知見と技術を修得する。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>① 日常生活の事象についての原理原則を理解する。 ② 生活用品・用具・成分などについて正しく理解し、介護の現場で適切に活用できる。 ③ 「生活文化」に関する知識をもち、利用者支援に反映させることができる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「生活を科学する」とは？： 「生活科学チェックテスト」を解き、正解を分析しながら「生活を科学的にとらえる」ための考え方について講じる。【講義】 2. 「日常生活の支援」とは？： 第1回に続き「生活科学チェックテスト」後半についての補足説明を行い、福祉利用者の生活支援のためにはどのような科学的・文化的な知識が必要かについて具体的に解説する。【講義】 3. 被服生活:被服の役割と機能・「装う」ことをとおしての生活支援 我々にとって心身ともに一番身近な衣服の役割・機能について概説する。特に「装い」による自己表現(美的機能)を支援に活かす方途を説く。【講義】 4. 被服生活:被服の素材;繊維の観察・繊維の種類と特徴①(天然繊維) 布から繊維を取り出し、観察する。主要な天然繊維の特徴について示すことにより、それらによって作られる布の性質が異なることを説明する。【観察・講義】 5. 被服生活:被服の素材;繊維の種類と特徴②(合成繊維) 合成繊維はどのように作られるのかを図示しながら詳説し、各種繊維の性能について講じる。【講義】 6. 被服生活:被服の素材;布の種類・布の加工と新素材 様々な布の製法や性質について見本を示しながら解説するとともに、介護の現場で用いられている布製品の特殊加工についても言及する。【観察・講義】 7. 被服生活:紙おむつの観察(被服素材の知識をもとに) 紙おむつを分解し、素材及び構成について観察する。さらに、吸水ポリマーやポリウレタンに関する実験を行い、紙おむつの科学について説く。【観察・講義】 8. 「生活文化」の知識①:春夏秋冬の自然 四季の植物・生き物・風物に関する知識を改めて確認し、それらを福祉の現場での支援に活用する方途について解説する。【講義】 					

9. 「生活文化」の知識②:春夏秋冬の行事
年中行事の意味や行事食などについて、由来・機縁を概説する。また、福祉施設において、これらをどのように日々の支援やレクリエーションに活用できるかについてのディスカッションを行い、随時コメントする。【講義・ディスカッション】
10. 介護を必要とする人の生活を豊かにするためのプロジェクト—生活文化に基づく働きかけ—①(趣旨説明・計画):
介護を必要とする人に対して「生活文化」に基づく働きかけをし、精神の活性化をはかるためのプロジェクトを考え合う。そのためのガイダンスを行う。【講義・グループワーク】
11. 介護を必要とする人の生活を豊かにするためのプロジェクト—生活文化に基づく働きかけ—②(計画・発表)
グループ毎に立案した計画を発表し合い、他グループの工夫を参考にする。また、質疑応答もを行い、内容を深める。【グループワーク】
12. 福祉施設における日常生活の支援のなかの生活科学・生活文化—実習での体験・経験の分析と共有—:
実習で経験した衣・食・住の支援をジャンル別に振り返って発表し合い、他の学生が経験したことがらとの相違点・共通点・各施設における工夫を見出す活動を行う。【発表】
13. 被服生活:被服と皮膚衛生・被服の管理①(取り扱い絵表示・組成表示等)
衣服の洗濯が何故必要なのか、汚れにはどのような種類があるのかについて講じる。【講義】
14. 被服生活:被服の管理②(洗濯(湿式・乾式)と品質表示)
家庭での湿式洗濯の手順・洗浄条件等を科学的に説明し、乾式洗濯・ウエットクリーニングについても言及する。さらに、汚れ落としのメカニズムについて詳説する。【講義】
15. 被服生活:被服の管理(漂白・しみ抜き・アイロンかけ・収納と保管)
被服の管理に欠かせない以下の項目について理解するための解説と実験・実習を行う。
・漂白剤の正しい使用 ・しみ抜きの原理と方法 ・アイロンかけ(スチームと霧吹き)
・防虫剤の使用法 ・利用者のための衣類のたたみ方と収納方法 【実験・実習・講義】
16. 「生活を科学する」—介護現場の生活科学と生活文化—:
前期の講義内容を振り返りながら、ケアワーカーに必要な生活科学・生活文化の知見を確認し、補足説明を行う。【講義】
17. 生活経営:家族・家庭生活の現状
家族の意義・家族に関する基礎用語・法律について説くとともに、福祉利用者と家族の現状について説明する。【講義】
18. 生活経営:経済と家計・生活時間と家事労働
国民経済と家計の関係を概括するとともに、給与明細の例から家計の収支について詳説する。また、高齢者の金銭面における生活の実情や、覚えておくべき用語の解説を行う。【講義】
19. 生活経営:消費者問題
問題商法について詳説するとともに、トラブル発生時の対応についても講じる。【講義】
20. 家庭生活の経営:ライフコース(人生設計)の作成①(解説・計画)
前回までの講義内容をふまえ、卒業してから死亡するまでの自身のライフコースを作成する(シミュレーション)。作成に関しては、金銭管理や老後の過ごし方についての提言を行う。【講義・実習】
21. 家庭生活の経営:ライフコース(人生設計)の作成(実践)
前回に続き、ライフコースを作成する。特に子どもの養育期～独立期及び高齢期について、家計・時間・健康面について解説を行う。高齢者福祉施設の利用者は、これらを体験して現在に至っていることを意識しながら活動とする。【講義・実習】
22. 住生活:住まいの役割と機能
家族の暮らしや地域との関係について説く。また、生活行為に伴う生活空間の問題や収納の工夫、快適な室内環境の整備に必要な光(採光・照明)・温度(冷暖房・通風・換気)・音(騒音)について概説する。加えて、維持管理についても補足説明を行う。【講義】
23. 住生活:住まいと安全
高齢者・障がい者が暮らしやすい住環境整備について解説する。その際、福祉用具・福祉機器の有効な利用についても言及する。【講義】

24.	住生活:訪問介護員として、一人暮らしの高齢者の日常生活を支援する これまで学んできた「生活支援技術B」の内容をもとに、訪問介護員としての利用者支援を行うための事例を検討し合う。【講義・グループワーク】
25.	被服生活:被服の選択(サイズ選び)と衣料障害 各種衣料のサイズ表示の見方について概説するとともに、加齢による体型の変化と適切な衣服選びについても講じる。さらに、科学物質による衣料障害についての補足説明を行う。【講義】
26.	被服生活:下着・靴・寝具 下着の役割・加齢による足部変化・寝床内気候について説く。【講義】
27.	被服生活:縫製の基礎—「生活に役立つ小物」製作—①(製作計画) 福祉施設利用者の生活支援に必要な裁縫の基礎技能を身につけるために、利用者に対する個別支援や施設でのレクリエーション活動にも活用できる作品の製作を行う。作品例を紹介するとともに、利用者とともに行う作品作りに際しての、動機付けや働きかけについて説明する。【講義・実習】
28.	被服生活:縫製の基礎—「生活に役立つ小物」製作—②(並縫い・まつり縫い) 基礎縫いの方法について示教する。各自が考案した計画に基づき、製作を進める。【講義・実習】
29.	被服生活:縫製の基礎—「生活に役立つ小物」製作—③(ボタン付け・スナップ付け) 前回から引き続き製作を行い、出来上がった作品の発表会を行う。【実習・発表】
30.	まとめ 今まで学んできた内容を振り返りながら、ケアワーカーとして自身が関心を持つ領域や事項について発表し合う。発表からお互いの長所を認め合い、今後の糧とする。【発表】

[履修に当たっての留意点]	
■双方向型(対話型)の授業を行っていくので、積極的に参加すること。	
■グループ学習の際は、メンバーと協力して取り組むこと。	
■ワークシート提出の頻度が高いので、時間内に仕上げる努力をすること。	
■日常生活に関する事象を取り扱うため、買い物・洗濯・掃除等を常に自身で行い“生活者”となっていること。	

[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会編集(2014年)『コミュニケーション技術 生活支援技術Ⅰ・Ⅱ』法律文化社 ◆『介護福祉士国家試験 受験ワークブック』中央法規出版 ◆配布資料	[単位認定の方法及び基準] 提出物(ワークシート・作品)70%・授業態度(積極性)30%
---	---

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術C		授業の種類 演習		授業担当者 三浦 大輝	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 前期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>病院・特別養護老人ホーム・デイサービス・居宅介護支援事業所での実務経験があり、現在は訪問リハビリテーションに従事しております。障害像のモデルが変化し、利用者様の尊厳が重要視される今、【必要な日常生活の世話】を提供するだけでなく、その人の生活歴や、現在の心身状況、予後予測から、自立支援に向けたケアを提供することが求められます。当授業では入院から在宅までの実務経験を活かし、【介護を実施する】だけでなく、医学的視点から一人一人に自立支援を行うための知恵や技術、考える力を教育していきます。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。対象者が【生存して活動する:生きる】ことだけでなく、医学的視点、ケアマネジメント理論を基に、【社会の中でその人らしく暮らす】ための自立支援を行い、人生における生きがいや、生活課題の解決について対象者と分かち合うことができることを目的とする。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>対象者の生活機能・心身機能・身体構造を把握・分析し、必要最低限の日常生活動作を支援するだけでなく、対象者に合わせた趣味・社会活動の維持・再獲得を目標とした包括的な支援が行えるような、マネジメント理論、介入技術を構築する。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>① 医学的視点、ケアマネジメント理論を基に、対象者の自立支援を考えることができる。 ② ICFの概念に基づいたアセスメントを理解することができる。 ③ 腰痛予防、ボディメカニクスなど、セルフマネジメントができる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション・講義の目的、目標、概要について説明する/講義 2. リハビリテーションの理念について説明する/講義 3. リハビリテーションの領域と役割、関わる職種・プロセスについて説明する/講義 4. 腰痛予防について説明し、実技を行う/講義・実技 5. 体位変換・移乗の理論を説明し、実技を行う/講義・実技 6. リハビリテーション介護について説明する/講義 7. 廃用症候群の理解のために、概論や症候を説明する/講義 8. 廃用症候群を予防する介護技術の方法について説明、実践する/講義・実技 9. 介護保険の流れ・ケアマネジメントについて説明する/講義 10. 住宅・福祉用具に関する知識を説明する/講義 11. 実習に役立つ知識・技術(ボディメカニクスを中心に)について説明、実演する/講義・実技 12. 社会的リハビリテーション・行政の役割について説明する/講義 13. ポジショニングについて説明する/講義 14. 前期まとめと解説/講義 15. 前期総括/講義 					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>特記事項なし</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>日本介護福祉士養成施設協会編集(2014年) 『コミュニケーション技術 生活支援技術Ⅰ・Ⅱ』 法律文化社</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>基準:試験50% ・ 受講態度50%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術C		授業の種類 演習		授業担当者 三浦 大輝	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期		必修・選択 必修	
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)					
[授業の目的・ねらい]					
[授業全体の内容の概要]					
[授業修了時の達成課題(到達目標)]					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]					
<p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 障害別リハビリテーション 脳卒中について説明する/講義・ディスカッション /講義 17. 障害別リハビリテーション 股関節疾患について説明する/講義・ディスカッション 18. 障害別リハビリテーション 変形性関節症について説明する/講義・ディスカッション 19. 障害別リハビリテーション 関節リウマチについて説明する/講義・ディスカッション 20. 障害別リハビリテーション 脊髄損傷について説明する/講義・ディスカッション 21. 障害別リハビリテーション パーキンソン病について説明する/講義・ディスカッション 22. 障害別リハビリテーション がん緩和ケアについて説明する/講義・ディスカッション 23. 障害別リハビリテーション 糖尿病について説明する/講義・ディスカッション 24. 障害別リハビリテーション 認知症の総論について説明する/講義・ディスカッション 25. 障害別リハビリテーション 認知症の対処法について説明する/講義・ディスカッション 26. 障害別リハビリテーション 内部障害について説明する/講義・ディスカッション 27. 障害別リハビリテーション 住環境整備について説明する/講義・ディスカッション 28. 前期講義のまとめ/講義 29. 後期講義のまとめ/講義 30. 前期・後期の振り返り/講義・ディスカッション 					
[履修に当たっての留意点]					
特記事項なし					
[使用テキスト・参考文献]			[単位認定の方法及び基準]		
日本介護福祉士養成施設協会編集(2014年) 『コミュニケーション技術 生活支援技術Ⅰ・Ⅱ』 法律文化社			基準:試験50% ・ 受講態度50%		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術D		授業の種類 演 習		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 前期		必修・選択 必 修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 介護福祉士は常に安全で安楽な介護技術の展開を求められている。介護施設における実務経験からもその展開能力は不可欠であると考え。現場で行われている自立支援への取り組みをもとに、根拠ある介護技術が習得できる授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 自立支援に向けた実践方法の習得のため、基礎的な技術と応用的な技術の根拠を視聴覚教材を活用しながら学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 移動介助を必要とする人に対し、様々な場面においてニーズを適確に把握し、根拠をもって介護技術を選択できるようになる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーションとガイダンス:(介護の理解、身体理解、ボディメカニクスと体位)(演習) 2. 安全で心地よい生活の場①:(移動の理解)(演習) 3. 安全で心地よい生活の場②:(移動支援について)(演習) 4. ICFに基づく「移動」とその意義と目的を考える(演習) 5. 安全で気兼ねなく動けることを支える介護とは何か?を考える(演習) 6. 体位の理解と体位変換①:演習(シーツ交換、枕の移動、水平移動)(演習) 7. 体位の理解と体位変換②:演習(シーツ交換、上方移動、安楽な体位の保持)(演習) 8. 体位の理解と体位変換③:演習(仰臥位から側臥位)(演習) 9. 体位の理解と体位変換④:演習(側臥位から端座位)(演習) 10. 体位の理解と体位変換⑤:演習(端座位から車椅子などへの移乗)(演習) 11. 「車椅子での移動」を支える介護①:演習(車椅子の基本操作、校内での車椅子操作)(演習) 12. 「車椅子での移動」を支える介護②:演習(車椅子の基本操作、校外での車椅子操作)(演習) 13. 安全な「歩行」を支える介護①:演習(杖の種類、杖の使用方法和援助)校内演習(演習) 14. 安全な「歩行」を支える介護②:演習(杖の種類、杖の使用方法和援助)校外演習(演習) 15. 移動の支援技術の総括(講義) 					
<p>[履修に当たっての留意点] 介護関係において、お互いに負担のない技術の習得を目指すため、基本的な日常において、食事や睡眠などには十分注意をして欲しい。実践演習を通して、援助者としての健康管理面も考えていきたい</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著(2014)「介護福祉士養成テキスト 3 コミュニケーション技術/生活支援技術 I・II」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 筆記試験50% 実技評価20% 提出物10% 授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術D		授業の種類 演習		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期		必修・選択 必修	
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 排泄援助は人間の尊厳に深く関わっている。介護施設における介護福祉士としての実務経験は、そのことへの深い理解につながっている。その実践事例をもとに、体験学習的に体感できる授業としたい。					
[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。					
[授業全体の内容の概要] 排泄行為への援助技術習得のみに止まらず、心理面にも配慮した「排泄の自立支援」について考え、その技術を身につけていく。					
[授業修了時の達成課題(到達目標)] 個々の障害の程度に応じた適切な介護技術の習得と共に、人の尊厳を重要視した対応能力を身につける。					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 16. オリエンテーション:排泄の意義(講義) 17. 排泄の目的(演習) 18. 排泄に関する利用者のアセスメント①(演習) 19. 排泄に関する利用者のアセスメント②(演習) 20. 気持ち良い排泄を支える介護①トイレの介助の支援(演習) 21. 気持ち良い排泄を支える介護②二人介助の支援(演習) 22. 安全・的確な排泄の介助の技法①ポータブルトイレの介助(演習) 23. 安全・的確な排泄の介助の技法②オムツの介助方法1(パッドの援助)(演習) 24. 安全・的確な排泄の介助の技法③オムツの介助方法2(布オムツの援助)(演習) 25. 安全・的確な排泄の介助の技法④オムツの介助方法3(オムツ交換)(演習) 26. 安全・的確な排泄の介助の技法⑤(便器・尿器・安楽尿器の使用法)(演習) 27. 利用者の状態・状況に応じた介助の留意点(演習) 28. 他職種の役割と協働について理解を深める(演習) 29. 排泄の支援技術の総括(演習) 30. 全体総括(講義)					
[履修に当たっての留意点] 身体介護の演習が中心であるため、演習のための装いはしっかりと整えたい。また、毎回の授業は連動しているため、一コマ一コマの授業にテーマを持って取り組むことが大切である。					
[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著 (2014)「介護福祉士養成テキスト 3 コミュニケーション技術/生活支援技術 I・II」 法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)			[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 筆記試験50% 実技試験20% 提出物10% 授業態度20%		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術E		授業の種類 演習		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 前期	必修・選択 必修		
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 介護施設における介護福祉士としての実務経験からも、快適な食事支援、適切な食事介助の技法を身につけることは要介護者のQOLに深く関わってくるということを感じた。口腔ケアの重要性とともに、介護福祉士の専門性としてその役割を考える授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] ①栄養と食事の基礎知識について学習するとともに、身体機能低下や咀嚼・嚥下障害、感覚障害、認知障害等の食事介護を必要とする利用者の状態に応じた適切な食事介助の技法を学ぶ。 ②口腔ケアについての理解を深め、その技術を習得する。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 基本的、応用的な食事介護方法と口腔の清潔の意義、手法についての理解ができる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「自立に向けた食事の介護・口腔の清潔の介護」のオリエンテーション(演習) 2. 介護を必要とする利用者の食事の意義と介護者の役割を解説する(演習) 3. 食事に関する利用者のアセスメントについての留意点を説明する(演習) 4. 食事摂取の基本的な知識について解説する(演習) 5. 誤嚥の予防と対応について説明する(演習) 6. 自力摂取可能な利用者への支援について解説する(演習) 7. 運動機能が低下している利用者の食事介助①(介助の準備)(演習) 8. 運動機能が低下している利用者の食事介助②(介助の方法)(演習) 9. 運動機能が低下している利用者の食事介助③(介助の留意点)(演習) 10. 認知症高齢者に対する食事介護の留意点(演習) 11. 視覚に障害を持つ利用者への食事介護に関する留意点(演習) 12. 健康状態に応じた食物・栄養摂取方法とケアについて(演習) 13. 口腔の清潔①口腔ケアの演習(演習) 14. 口腔の清潔②口腔ケアの演習(演習) 15. 食事の支援技術の総括(講義) 					
<p>[履修に当たっての留意点] 演習にあたっては、様々な状況を想定した演習を考えている。実践の場面で生きるような技術の習得が目標であるため、毎回の出席を望みたい。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著 (2014)「介護福祉士養成テキスト 3 コミュニケーション技術/生活支援技術 I・II」 法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 筆記試験50% 実技評価20% 提出物10% 授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術E		授業の種類 演習		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期	必修・選択 必修		
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）</p> <p>入浴を始めとする清潔面への支援は、日々の生活意欲を引き出す効果も期待できる。介護施設での介護福祉士としての実務経験からも、要介護者にとっては心地の良い場面が、正しい介護技術の展開や配慮に欠けることがあれば苦痛に変わってしまうことを感じた。実践演習を通して、その理解を深められる授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>障害や高齢により思うように入浴ができない状況にある人に対して、介護者はどのような支援を行うべきか、清潔保持の必要性やその援助方法を学ぶ。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>安全に配慮した介助方法を理解し、実践能力を身につけることにより、利用者の状態や状況に応じた入浴の支援ができる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 「清潔の意義と目的」のオリエンテーション(演習) 17. 入浴に関する利用者のアセスメントについての留意点(演習) 18. 爽快感・安楽を支える介護を考える(演習) 19. 利用者の状況・状態に応じた介助の留意点を解説する(演習) 20. 安全で安楽な入浴・清潔保持の介助方法①(個浴)(演習) 21. 安全で安楽な入浴・清潔保持の介助方法②(特浴)(演習) 22. 安全で安楽な入浴・清潔保持の介助方法③(手浴、足浴)(演習) 23. 「衣生活の意義と目的」のオリエンテーション(演習) 24. 衣生活に関する利用者のアセスメントについての留意点を説明する(演習) 25. 安全で快適な衣生活への介助①(前開き衣類交換の介助方法)(演習) 26. 安全で快適な衣生活への介助②(かぶり式の衣類交換の介助方法)(演習) 27. 安全で快適な衣生活への介助③(片麻痺の方への介助方法)(演習) 28. 安全で快適な衣生活への介助④(寝たきりの方への介助方法)(演習) 29. 清潔・入浴の支援技術及び身じたくの支援技術の総括(演習) 30. 全体総括(講義) 					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>入浴、着脱演習では援助者側の健康管理も重要となってくるため、日々留意する必要がある。この貴重な体験演習を介護福祉士としてのスキルとして身につけられることを望みたい。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著(2014)「介護福祉士養成テキスト 3 コミュニケーション技術/生活支援技術 I・II」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p style="text-align: center;">(試験やレポートの評価基準など)</p> <p>筆記試験50% 実技評価20% 提出物10% 授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生活支援技術F		授業の種類 講 義		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 前期	必修・選択 必 修		
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 介護施設における介護福祉士としての実務経験においては、数々の看取りの場面を経験した。終末期では要介護者のみならず家族へのケアも介護福祉士にとって大切な役割である。実際の事例も交えながらその心構えを学び合える授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識・技術を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] ①人間として当たり前である安楽な睡眠の願いが果たされない高齢者や障害者の生理、心理を十分に理解し環境整備やベッドメイキングを学び、利用者の心身状況や個別性に応じた臨機応変な安眠のための介護の力を養う。 ②終末期への理解を深め、介護福祉士の役割を自覚する。 ③福祉用具の意義と活用</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 睡眠の重要性の理解とその環境づくりへの工夫ができる。終末期における介護技術の習得と介護福祉士としての役割が自覚できる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「睡眠の意義、目的と個別性」のオリエンテーション(講義) 2. 睡眠のアセスメントと安眠への介護(講義) 3. 睡眠の理解について(講義) 4. 睡眠時の身体的変化について(講義) 5. 睡眠を阻害する因子とは(環境的因子、身体的因子、精神的因子)(講義) 6. 安眠への援助方法について(講義) 7. 睡眠の支援技術の総括(講義) 8. ターミナルケア、死にゆく人の理解(講義) 9. 延命治療に対するホスピスケアについて(講義) 10. 終末期の心身状況、QOL高める身体生活援助について(講義) 11. 終末期の利用者と家族の心理のサポート(講義) 12. 終末期の利用者と家族とのコミュニケーション(講義) 13. 福祉用具の意義と活用①(講義) 14. 福祉用具の意義と活用②(講義) 15. 全体総括(講義) 					
<p>[履修に当たっての留意点] 終末期における介護福祉士は他職種連携のうえにおいてもキーマンである。様々な気づきはチームケアの方向性を決定することも少なくない。そのことを基軸としながら授業展開していく。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、中村明美・岩井恵子・井上千津子著 (2014)「介護福祉士養成テキスト 3 コミュニケーション技術/生活支援技術 I・II」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 筆記試験70% 提出物10% 授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 介護過程 I		授業の種類 講 義		授業担当者 植田 裕太郎	
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 前期	必修・選択 必 修		
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 特別養護老人ホームの介護職員としての実務経験をもとに、対象者の「その人らしい生活とは何か」を、介護過程の展開を通して考えていく授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 他の科目で学習した知識や技術を統合して介護過程を展開し、適切な介護計画の立案能力を養う。また、それらをどのようにケアに活かすかということを理解する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 課題(ニーズ)を理解し目標を定め、求められる支援に導くための介護過程という思考能力を身につける。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 介護過程とは個々のニーズを的確に把握し、計画的に介護を実践・評価することの連続であるということが理解できる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、介護過程とは 2. 介護過程の思考過程について理解する(講義) 3. 介護過程の意義と目的①について理解する(講義) 4. 介護過程の意義と目的②について理解する(講義) 5. 介護過程における問題解決課程について理解する(講義) 6. 介護過程における分析と仮設について理解する(講義) 7. 介護計画におけるニーズについて理解する(講義) 8. 介護計画立案について理解する(演習) 9. 介護計画の実施について理解する ～レクリエーションの視点～(演習) 10. ケア会議の意義について理解する(講義) 11. 介護におけるその人らしさを理解する(演習) 12. 介護過程とケアマネジメントの関連性(ケアプランと個別サービス計画)について解説する 13. 介護過程とチームアプローチ①(チームアプローチにおける介護職の役割)について説明する 14. 介護過程とチームアプローチ②(専門職同士の連携)について説明する 15. 前期総括 					
<p>[履修に当たっての留意点] 介護過程の授業内容は介護実習に直結するものが多く、第2段階実習においては個別援助計画作成、実施という課題もある。常に、実際の場面をイメージしながら取り組むことが大切である。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、川井太加子・野中ますみ著 (2014)「介護福祉士養成テキスト 2 介護の基本/介護過程」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) ①筆記試験50% ②課題提出30% ③授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 介護過程 I		授業の種類 講 義		授業担当者 植田 裕太郎
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期	必修・選択 必 修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 特別養護老人ホームの介護職員としての実務経験をもとに、対象者の「その人らしい生活とは何か」を、介護過程の展開を通して考えていく授業としたい</p>				
<p>[授業の目的・ねらい] 他の科目で学習した知識や技術を統合して介護過程を展開し、適切な介護計画の立案能力を養う。また、それらをどのようにケアに活かすかということを理解する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 課題(ニーズ)を理解し目標を定め、求められる支援に導くための介護過程という思考能力を身につける。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 介護過程とは個々のニーズを的確に把握し、計画的に介護を実践・評価することの連続であるということが理解できる。</p>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 介護過程の進め方について説明する 17. ケアマネジメントをふまえた介護過程の展開(ケアプランの作成)について説明する。 18. 介護過程の展開において人の生活について考える 19. 【事例 1】(グループワーク) 20. 【事例 1】(グループワーク) 21. 【事例 2】(グループワーク) 22. 【事例 2】(グループワーク) 23. 【事例 3】(グループワーク) 24. 【事例 3】(グループワーク) 25. 【事例 4】(グループワーク) 26. 【事例 4】(グループワーク) 27. 事例のまとめ 28. 介護福祉士の専門性である介護過程について 29. 介護福祉士の専門性である介護過程の展開について 30. 後期総括 				
<p>[履修に当たっての留意点] チームアプローチの観点から介護福祉士の専門性である介護過程の展開を考えたい。グループでの活動が多くなるため、授業を通してチーム連携のあり方を学ぼうとする姿勢が大切である。</p>				
日本介護福祉士養成施設協会、川井太加子・野中ますみ著(2014)「介護福祉士養成テキスト 2 介護の基本/介護過程」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)		<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) ①筆記試験50% ②課題提出30% ③授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 介護過程Ⅱ		授業の種類 講義		授業担当者 植田 裕太郎
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 前期	必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 特別養護老人ホームでの介護福祉士としての実務経験からも、他職種連携のあり方は介護過程の基本と考える。その共通言語であるICFの理解を深められる授業としたい。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい] 本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] ①介護サービス計画や協働する他の専門職のケア計画と個別計画との関係性、チームとして介護過程を展開することの意義や方法を理解する。 ②ICFの理解を深めるため、様々なグループワークに取り組む。ICFの構成要素ごとへの分類能力やアセスメント能力の向上を目指したい。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 他職種連携における介護福祉士の専門性というものが明確になる。そのことにより利用者を取り巻く環境を意識し、常に社会の動きに関心をもつことの重要性が理解できる。</p>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報の種類と情報収集の方法(講義) 2. 観察について理解する(講義) 3. 介護過程に必要な情報を理解する①～情報の読み取り方～(グループワーク) 4. 介護過程に必要な情報を理解する②～情報収集の考え方～(グループワーク) 5. アセスメントの重要性の理解① ～介護実習における介護過程の留意点～ 6. アセスメントの重要性の理解② ～介護実習における介護過程の考え方～ 7. アセスメントの重要性の理解③ ～介護実習における介護過程の記載方法～ 8. アセスメントの重要性の理解④ ～介護実習における介護過程の記載方法(A様の事例を通して) 9. アセスメントの重要性の理解⑤ ～介護実習における介護過程の記載方法(B様の事例を通して) 10. アセスメントの重要性の理解⑥ ～介護実習における介護過程の記載方法(C様の事例を通して) 11. 介護過程の事例展開①(グループワーク) 12. 介護過程の事例展開②(グループワーク) 13. 介護過程の事例展開③(グループワーク) 14. 介護過程の事例展開④(グループワーク) 15. 前期総括(講義) 				
<p>[履修に当たっての留意点] ICFの基本的理解からフォーマットへの分類能力の習得を目標としている。他職種連携のためには欠かせない技能であるため、基礎的知識の積み重ねが重要である。</p>				
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、川井太加子・野中ますみ著(2014)「介護福祉士養成テキスト 2 介護の基本/介護過程」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>		<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 筆記試験50% 課題提出30% 授業態度20%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 介護過程Ⅱ		授業の種類 講 義		授業担当者 植田 裕太郎
授業の回数 30	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期		必修・選択 必 修
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)				
[授業の目的・ねらい]				
[授業全体の内容の概要]				
[授業修了時の達成課題(到達目標)]				
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]				
コマ数 16. 後期オリエンテーション(講義) 17. 介護過程を実践する①～アセスメント～(講義) 18. 介護過程を実践する②～介護計画の立案～(グループワーク) 19. 介護過程を実践する③～介護計画の実施～(グループワーク) 20. 介護過程を実践する④～介護計画の評価～(グループワーク) 21. 介護過程を実践する⑤～発表～(グループワーク) 22. 介護過程を実践する⑤～発表～(グループワーク) 23. 介護過程を実践する⑤～発表～(グループワーク) 24. 介護過程におけるチームアプローチの実際を学ぶ① 介護福祉士の役割 25. 介護過程におけるチームアプローチの実際を学ぶ③ 介護福祉士としての専門職の在り方 26. 介護福祉士における介護過程のアセスメント 27. 介護福祉士における介護計画の立案 28. 介護福祉士における介護計画の実施 29. 介護福祉士における介護過程の評価 30. 後期総括(講義)				
[履修に当たっての留意点] 様々な教材も活用し、ある事例に対してICFの視点から課題を抽出するグループワークを行う。各人の意見や着眼点をそれぞれの構成要素に分類していくため、毎回の出席が望まれる。				
[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、川井太加子・野中ますみ著 (2014)「介護福祉士養成テキスト 2 介護の基本/介護過程」 法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)			[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) 筆記試験50% 課題提出30% 授業態度20%	

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 介護過程Ⅲ		授業の種類 講 義		授業担当者 齋藤 至孝	
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科 後期		必修・選択 必 修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 介護福祉士の職務において、カンファレンスのための書類作成、記録の管理能力は、継続したケアの実現のために重要である。介護老人保健施設での実務経験を教材として、現場で活用できる実践能力を身につけられる授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要] ①個別の事例を通じて、対象者の状態や状況に応じた介護過程の展開を学ぶ。 ②介護実習との相互性を活かし実践的思考とスキルの習得を目指す。その中で専門職としての理念を構築し、介護福祉士としてのアイデンティティを確立していく。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 介護過程の展開における評価の重要性を理解し、その評価が正当なものであるかどうかの判断、また他者の計画への正当な評価ができるようなスキルを身につける。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護過程におけるチームアプローチの実際①(講義) 2. 介護過程におけるチームアプローチの実際②(グループワーク) 3. 介護過程におけるチームアプローチの実際③(グループワーク) 4. 介護過程におけるチームアプローチの実際④(グループワーク) 5. 介護過程におけるチームアプローチの実際⑤(グループワーク) 6. 介護過程におけるチームアプローチの実際⑥(グループワーク) 7. 介護過程における説明と同意①(講義) 8. 介護過程における説明と同意②(グループワーク) 9. アセスメントツールの活用(グループワーク) 10. アセスメントツールの開発(グループワーク) 11. 余暇活動への支援①(グループワーク) 12. 余暇活動への支援②(グループワーク) 13. 終末期の介護過程①(グループワーク) 14. 終末期の介護過程②(グループワーク) 15. 全体総括～専門職としてあるべき姿を見すえる(講義) 					
<p>[履修に当たっての留意点] 介護実習における実践活動をケースレポートとしてまとめ上げるという作業は、介護福祉士養成校のカリキュラムにおいての集大成である。各科目で学んだ事柄を根拠として展開していくことが必要となってくる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 日本介護福祉士養成施設協会、川井太加子・野中ますみ著(2014)「介護福祉士養成テキスト 2 介護の基本/介護過程」法律文化社 他(資料授業中に紹介、配布)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] (試験やレポートの評価基準など) ケースレポート提出50% 出席、授業態度50%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル (科目名) 介護総合演習		授業の種類 演 習		授業担当者 山浦 あゆみ	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4)	配当学年・時期 介護福祉専攻科・通年	必修・選択 必 修		
実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性) 看護師としての医療現場と介護現場での臨床経験から、実習における基本的マナーと対象者への実際のかかわり方および、双方の安全を守る方法についての考え方を教授する。					
[授業の目的・ねらい] 介護実践に必要な知識と技術の統合を行うとともに、介護観を形成し、専門職としての態度を養う。					
[授業全体の内容の概要] 各段階の実習目標に沿った、実習の準備を行う。また実習後は実習で明確になった自己の課題の改善に向け、介護福祉士に必要な知識・技術の向上を目指した授業を行う。各段階の実習終了直後には、「実習成果報告会」として知識・技術の共有と、自己の振り返りの目的で、一人ずつ企画の立ち上げから準備、発表を行い実習成果の確認と、プレゼンテーション能力を養う。					
[授業修了時の達成課題(到達目標)] <ul style="list-style-type: none"> ・他者との人間関係構築のためのコミュニケーション技術や、社会規範、マナーを習得する。 ・介護施設の概要と、利用者の生活が理解でき、介護福祉士の役割を明確化できる。 ・自分自身の実習目標や課題を明確化できる。 ・他者とのディスカッションや、プレゼンテーションができる。 					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. 各科目で学んだ知識と技術の統合。介護実習の枠組みと全体像の理解。実習Ⅰ、Ⅱ(第一段階、第二段階)の相違の理解 2. 介護実習とはなにか、実習の意義と目的(実習要項) 3. 介護活動の場と介護の特性-①特別養護老人ホーム、介護老人保健施設障害者支援施設(第1段階実習、第2段階実習) 4. 介護活動の場と介護の特性-②通所介護事業、重症心身障害児・者施設、訪問介護事業所(第1段階実習、第2段階実習および在宅同行訪問実習) 5. 実習におけるスーパービジョン、自分自身の健康管理、接遇マナー、コミュニケーション、実習時の連絡の仕方 6. 実習の到達課題 実習要項を使って説明(第1段階) 7. 個人票の書き方 学生が記載-①下書き(第1段階) 8. 個人票を学生が記載-②本書き(第1段階) 9. 「実習先について調べよう」の書き方 学生が記載し、実習先の事前理解を図る。-①下書き(第1段階) 10. 「実習先について調べよう」を学生が記載し、実習先の事前理解を図る。-②本書き(第1段階) 11. オリエンテーションの受け方、オリエンテーションのアポイントの取り方 12. 演習:実習記録の書き方と作成-①実習記録 13. 実習記録の書き方と作成-②アセスメントシート、ADLシート 14. 帰学日(第1段階)-中間報告書の記載を指導 アセスメントシート、実習記録の指導 15. 実習事後指導(第1段階)-実習15日分の振り返り					

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

16. 実習事後指導（第1段階）－②実習先への御礼状書き
17. 実習成果報告会（第1段階）－①実習施設で学んだことや技術の伝達・報告を発表
18. 実習成果報告会（第1段階）－②実習施設で学んだことや技術の伝達・報告を発表
19. 実習の到達課題 実習要項を使って説明（第2段階）
20. 個人票の書き方 学生が記載－①下書き（第2段階）
21. 個人票を学生が記載－②本書き（第2段階）
22. 「実習先について調べよう」の書き方について説明し、実習先の事前理解を図る。
学生が記載－①下書き（第2段階）
23. 「実習先について調べよう」を学生が記載し、実習先の事前理解を図る。－②本書き（第2段階）
24. 実習記録の書き方と作成－個別援助計画
25. 帰学日（第2段階）－現時点での課題の抽出・解決。個別援助計画、アセスメントシート、実習日誌の指導
26. 実習事後指導（第2段階）－①実習20日分の振り返り。
27. 実習事後指導（第2段階）－②実習先への御礼状書き
28. 実習成果報告会（第2段階）－①実習施設で学んだことや技術の伝達・報告を発表。
29. 実習成果報告会（第2段階）－②実習施設で学んだことや技術の伝達・報告を発表。
30. 実習成果報告会（第2段階）－③実習施設で学んだことや技術の伝達・報告を発表。

[履修に当たっての留意点]

実習前においては、対象となる利用者様の安全・安楽・自立の視点で実習ができるよう、十分な準備をおこなうこと。

実習後には、次の実習や学校生活に活かせるように振り返りを行うこと。

後期の発表の機会においては、自身の実習での経験をこれからの介護に活かせるように、他者と共有できるようにプレゼンテーションに臨むこと。

[使用テキスト・参考文献]

荒木和美他（2019）『最新 新・介護福祉士養成講座 第10巻介護総合演習・介護実習』 中央法規出版社
介護実習要項
白井幸久・土屋昭雄（2024）『介護実習ガイドブック 不安解消のための40講』 看護の科学新社

[単位認定の方法及び基準]

筆記試験：実習要項より60%
実習巡回指導時の姿勢・態度30%
授業態度10% 等総合的判断

*コロナ情勢が落ち着いた場合に加える事項。

講義：在宅同行訪問実習について説明する。在宅同行訪問実習とは、在宅実習ならではの留意事項、実習書類、オリエンテーション。

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 発達と老化の理解		授業の種類 講義		授業担当者 茂木 圭介	
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・後期	必修・選択 必修		
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 大学病院勤務での実務経験を活かし、看護師の立場から生涯の心身の変化、老化に伴う変化等について講じる					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>成長・発達する過程を通して個人を理解し、老年期における発達課題や高齢者に多い症状・疾病の特徴、老化がもたらす高齢者の生活への影響を身体的・精神的・社会的側面からとらえ、老化に伴う心と体の変化の特徴とその対応について必要な知識を学ぶ</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>人間の成長と発達の観点から人の一生についての知識を習得する 老化に伴う心理や身体機能の変化、およびその特徴に関する基礎的知識を習得する</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.さまざまな発達理論があること、各発達理論における発達段階や発達課題、愛着について理解できる 2.老化にともなう身体的・心理的・社会的な変化が、どのように生活へ影響するのかを理解できる 3.高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点が見える 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、人間の成長と発達の基礎的知識について概説する(講義) 2. さまざまな発達理論について概説する(講義) 3. 身体的・心理的・社会的機能の発達について概説(講義) 4. 老年期の定義と老年期の発達課題、喪失体験について概説する(講義) 5. 加齢にともなう生理機能の変化について概説する(講義) 6. 老化にともなう身体機能の変化と日常生活への影響について概説する(講義) 7. 老化にともなう心理的、知的機能の変化と日常生活への影響について概説する(講義) 8. 老化にともなう社会的な変化と日常生活への影響について概説する(講義) 9. 高齢者の健康、高齢者の症状・疾患の特徴について概説する(講義) 10. 高齢者に多い疾患とその留意点(骨・筋系、脳・神経系、皮膚・感覚器系)について説明する(講義) 11. 高齢者に多い疾患とその留意点(循環器、呼吸器、消化器系)について説明する(講義) 12. 高齢者に多い疾患とその留意点(腎・泌尿器、内分泌・代謝、歯・口腔系)について説明する(講義) 13. 高齢者に多い疾患とその留意点(悪性新生物、感染症、精神疾患)について説明する(講義) 14. 他職種との連携について事例検討(グループディスカッション) 15. まとめと解説 					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>実習の際、老化に伴う身体的・心理的・社会的変化にはどんなものがあるかを意識して学習に取り組む 毎授業終了時、授業内容の小テストを配布、復習として回答、次回授業で提出。それを「提出物」とする</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>介護福祉士養成講座編集委員会 編集 (2019年) 『最新 介護福祉士養成講座12 発達と老化の理解』 中央法規出版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>定期試験70% 提出物15% 授業態度15%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 認知症の理解		授業の種類 講 義		授業担当者 齋藤 至孝	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・前期	必修・選択 必 修		
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>知的障害者施設(就労支援施設)で生活支援員として7年、介護老人保健施設の支援相談員として8年の実務経験を活かし、実際の現場でのエピソードを交えながら、将来介護職についたときに役立つ内容の講義を行い、各自のイメージアップにつなげる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>認知症の人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに、認知症の人を中心に据え、本人や家族、地域の力を活かした認知症ケアについて理解するための基礎的な知識を習得する学習とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>認知症の中核症状や心理・行動症状について学ぶと共に、認知機能の変化が生活に及ぼす影響の背景を理解することが具体的な対応策につながることを学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症高齢者の尊厳を守り、安心できる安全な生活を支援するために必要な知識や技術を習得することができる。 ・認知機能の変化が生活に及ぼす影響について理解することができる。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「認知症のある高齢者の現状と今後」 について解説する【講義】 2. 「認知症とは何か」 について解説する【講義】 3. 「脳のしくみ」 について解説する【講義】 4. 「認知症の人の心理」 について解説する【講義】 5. 「中核症状の理解」 について解説する【講義】 6. 「生活障害の理解」 について解説する【講義】 7. 「BPSDの理解」 について解説する【講義】 8. 「認知症の診断と重症度」について解説する【講義】 9. 「認知症の原因疾患」 について解説する【講義】 10. 「認知症の治療薬」 について解説する【講義】 11. 「認知症の予防」 について解説する【講義】 12. 「認知症の人を取り巻く状況」について解説する【講義】 13. 「認知症ケアの理念と視点」 について解説する【講義】 14. 「認知症当事者の視点からみえるもの」 について解説する【講義】 15. まとめと解説 					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>介護福祉士養成講座編集委員会編集 (2019年) 『最新 介護福祉士養成講座13 認知症の理解』 第2版 中央法規出版 (その他、適宜資料を配布・紹介)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>出席・授業態度30% 試験(小テスト含)70%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 認知症の理解		授業の種類 講 義		授業担当者 矢嶋 栄司	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60(4)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・後期	必修・選択 必 修		
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）</p> <p>介護施設における介護福祉士としての実務経験からも、快適な食事支援、適切な食事介助の技法を身につけることは要介護者のQOLに深く関わってくるということを感じた。認知症の方への対応の重要性とともに、介護福祉士の専門性としてその役割を考える授業としたい。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>認知症の人の心理や身体機能、社会的側面に関する基礎的な知識を習得するとともに、認知症の人を中心に据え、本人や家族、地域の力を活かした認知症ケアについて理解するための基礎的な知識を習得する学習とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>認知症の中核症状や心理・行動症状について学ぶと共に、認知機能の変化が生活に及ぼす影響の背景を理解することが具体的な対応策につながることを学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症高齢者の尊厳を守り、安心できる安全な生活を支援するために必要な知識や技術を習得することができる。 ・認知機能の変化が生活に及ぼす影響について理解することができる。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 16. 「認知症の人の思いを尊重したサポート方法」について解説する【講義】 17. 「パーソン・センタード・ケア」について解説する【講義】 18. 「認知症の人の特性をふまえたアセスメントツール」について解説する【講義】 19. 「認知症の人とのコミュニケーション」について解説する【講義】 20. 「認知症の人への具体的なケア」について解説する【講義】 21. 「認知症の人へのさまざまなアプローチ」について解説する【講義】 22. 「認知症の人の終末期医療と介護」について解説する【講義】 23. 「認知症の人に配慮した環境作り」について解説する【講義】 24. 「家族への理解と支援」について解説する【講義】 25. 「介護福祉職が行う認知症の人の家族への支援」について解説する【講義】 26. 「認知症の人の地域生活支援」について解説する【講義】 27. 「地域ケアシステムにおける認知症ケア」について解説する【講義】 28. 「認知症当事者の活動」について解説する【講義】 29. 「認知症の人にかかわる多職種連携と協働」について解説する【講義】 30. まとめと解説 					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>介護福祉士養成講座編集委員会編集（2019年） 『最新 介護福祉士養成講座13 認知症の理解』 第2版 中央法規出版 (その他,適宜資料を配布・紹介)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>出席・授業態度30% 試験(小テスト含)70%</p>		

授業概要

授業のタイトル(教科名) 障害の理解		授業の種類 講義		授業担当者 齋藤 至孝	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・前期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 知的障害者施設(就労支援施設)で生活支援員として7年、介護老人保健施設の支援相談員として8年の実務経験を活かし、実際の現場でのエピソードを交えながら、将来介護職についたときに役立つ内容の講義を行い、各自のイメージアップにつなげる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 高齢者、児童、障害者のみならず、だれしも何らかの困難がある。生活支援の介護をするうえでの基本的な知識を身に付ける。 [授業全体の内容の概要] 基礎的理解として障害の概念、障害者福祉の基本的理念を理解する。障害別の基礎的理解と特性に応じた支援について学ぶ。家族への支援、連携と協働について学ぶ。 [授業修了時の達成課題(到達目標)] 障害のある人の心理や身体機能を理解し、地域や家族を含めた障害のある人の生活支援について理解を深め根拠にもとづいた生活支援、よりよい介護実践につなげることができる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「障害の概念：障害のとらえ方・ICF・障害者の定義」について解説する【講義】 2. 「障害者福祉の基本理念：インクルージョン・エンパワメント・ストレングス」について解説する【講義】 3. 「障害者福祉に関連する制度：障害者総合支援法・障害者差別解消法」について解説する【講義】 4. 「障害者福祉制度と介護保険制度の違い・サービスの併用」について解説する【講義】 5. 「障害のある人の心理：人間の欲求・適応規制・障害受容の過程」について解説する【講義】 6. 「肢体不自由(運動機能障害)：障害の原因・身体的特性の理解」について解説する【講義】 7. 「視覚障害、聴覚障害、言語障害：障害の特性に応じた支援」について解説する【講義】 8. 「重複障害、内部障害：障害の原因と種類、特性に応じた支援」について解説する【講義】 9. 「重症心身障害：障害の原因と分類、特性に応じた支援」について解説する【講義】 10. 「知的障害、精神障害：障害の原因と種類、特性に応じた支援」について解説する【講義】 11. 「高次脳機能障害、発達障害：障害の特性の理解、特性に応じた支援」について解説する【講義】 12. 「難病：難病の理解、特性に応じた支援」について解説する【講義】 13. 「連携と協働：地域のサポート体制、チームアプローチ」について解説する【講義】 14. 「家族への支援：家族の介護力の評価と介護負担の軽減、支援法」について解説する【講義】 15. まとめと解説 					
<p>[履修に当たっての留意点] 毎回授業で行うテキストの範囲を読んでおくことを前提とする。授業で行うテキストの範囲は事前に知らせる。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座編集委員会編集（2019年） 『最新介護福祉士養成講座 14 障害の理解 第2版』 中央法規出版 (その他、適宜資料を配布・紹介)</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 出席・授業態度 30% 試験(小テスト含) 70%</p>		

授 業 概 要

授業のタイトル(科目名) こころとからだのしくみ		授業の種類 講 義		授業担当者 山浦 あゆみ	
授業の回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 介護福祉専攻科・通年	必修・選択 必 修		
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>看護師としての医療現場、介護現場での経験を活かし、介護に携わる際に必要な人間の心のあり方や人体の機能・疾患・治療を理解して、介護援助につなげられるよう講義をおこなう。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>保育士養成課程で学んだ内容を踏まえて、介護を必要とする人の生活支援をおこなうため、介護実践の根拠となる人間の心理、人体の構造や機能を理解する。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>こころとからだのしくみⅠでは、介護の専門性の根拠となる心のありかたと身体の構造と生理を学び、基礎知識として身に付ける。</p> <p>心の働きや人体の構造・機能、生命維持の働きを理解してから、こころとからだのしくみⅡにおいて、移動・食事・清潔保持等の生活支援を行う際に必要となる、日常生活動作に関する介護実践との繋がりを学ぶ。</p> <p>人生の最終段階にある人と家族を支援するため、終末期の人間の心の動きや死の受容、体の変化を理解し、終末期の心身の変化が生活に及ぼす影響について学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こころのしくみ(基本的、社会的ニーズ、記憶、適応)について理解できる。 ・からだのしくみ(人体各部の名称、人体の機能)を自分の身体に置き換えて、理解することができる。 ・こころとからだの基礎的内容を、身じたく、移動、食事、入浴・清潔、排泄、睡眠等、生活や自立支援に必要な介護実践に活かすことができる。 ・死に対する心の変化、死の捉え方、終末期の体の変化と死後の身体の変化を理解できる。 ・医療職の役割と、介護職のできることを理解できる。 					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. こころとからだのしくみⅠ・Ⅱ 「こころとからだのしくみ」を学ぶ意義を概説 基礎知識の確認のためにプレテストを実施(内容は、からだについて、三大栄養素、死因順位等) 2. こころとからだのしくみⅠ:人間の基本的欲求、「マズローのピラミッド」を基に説明 3. こころとからだのしくみⅠ:適応と適応機制(1・2年次に履修している内容を引き出しながら説明) 4. こころとからだのしくみⅠ:人間の記憶(記憶のしくみ、長期記憶、短期記憶、展望記憶など) 5. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ①細胞→組織→器官、細胞、核、DNA(高校の知識を確認しながら説明) 6. こころとからだのしくみⅠ:これから学ぶ器官系の全体(脳神経、呼吸器系、消化器系、骨・筋系、感覚器系、泌尿器系、生殖器系、循環器系、血液・リンパ、内分泌系の順で) *以下①～⑥にICFの考えを含めて教授 7. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ②脳のしくみとはたらき 8. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ③骨格系のしくみとはたらき 9. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ④筋肉系(骨格筋、平滑筋、心筋、腱・靭帯等附属物)のしくみとはたらき 10. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「移動」に関連する筋・骨格系のしくみとはたらきー① 11. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「移動」に関連する筋・骨格系のしくみとはたらきー②(機能低下と影響) 12. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑤呼吸器系のしくみとはたらき 13. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑥消化器系のしくみとはたらき 14. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「食事」に関連する消化器系のしくみとはたらきー①(満腹・空腹のメカニズム食事に関連した感覚) 15. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「食事」に関連する消化器系のしくみとはたらきー②(食べる仕組みの理解咀嚼・嚥下機能低下の原因と影響) 					

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

16. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑦感覚器系(眼、耳、鼻、口腔歯牙、皮膚・毛)のしくみとはたらき
17. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「身じたく」に関連する感覚器系のしくみとはたらき(皮膚・口腔歯牙の生理、身じたくの意味)
18. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「入浴・清潔保持」に関連する感覚器系のしくみとはたらき①(皮膚の汚れと発汗のしくみ等)
19. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「入浴・清潔保持」に関連する感覚器系のしくみとはたらき②(入浴・洗髪・その効果)
20. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑧泌尿器系(腎臓、尿路、膀胱、尿道と尿の生成)
21. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「排泄」に関連する泌尿器系のしくみとはたらき①(尿・便の生成、生理的意味の理解、排泄介助の必要性)*消化器系は、前期の13コマ目に教授済み
22. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「排泄」に関連する泌尿器系のしくみとはたらき②(機能低下の原因と影響、便秘・下痢の理解、排泄介助)*消化器系は、前期の13コマ目に説明済み
23. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑨循環器系(心臓、弁、動脈・静脈、冠状動脈のはたらきと疾患)
24. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑩生殖器系 *男女性差から、泌尿器系にもつながる説明
25. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑪内分泌系(ホルモン系統)
26. こころとからだのしくみⅠ:からだのしくみ⑫血液(赤血球・白血球・血小板・血漿)、リンパ系の説明
27. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「睡眠の援助」に関連するしくみとはたらき①(睡眠のしくみと生理)
28. こころとからだのしくみⅡ:介護実践の「睡眠の援助」に関連するしくみとはたらき②(機能低下の原因と睡眠への影響)
29. こころとからだのしくみⅡ:死にゆく人のこころとからだ①(死のとらえ方について、終末期と死後の身体的・機能的変化)
30. こころとからだのしくみⅡ:死にゆく人のこころとからだ②(死の受容、家族も含めたこころのケア、他職種連携)

[履修に当たっての留意点]

- ・専門用語も多く難解な科目であるので、自分自身の心身の認識から理解につなげられるよう、日々健康と自分の心と体を意識して過ごすこと。
- ・特に、2020年からの新型コロナウイルスの蔓延を機に、感染防止の視点を持ち、感染を拡げることがないよう福祉従事者として感染防止の意識を高く持てるような行動をすること。(手洗い、含嗽、清掃、消毒)
- ・講義後には復習をおこなうこと。

使用テキスト・参考文献]

パワーポイント資料
秋山昌江他 (2019)『最新 介護福祉士養成講座11
こころとからだのしくみ』中央法規出版
(資料授業中に紹介、配布)

[単位認定の方法及び基準]

筆記試験 80%
授業態度 10%
授業ごとのプレテスト 10% 等総合的判断

授 業 概 要

授業のタイトル（教科名） 医療的ケア I		授業の種類 講 義		授業担当者 山浦 あゆみ
授業の回数 26回	時間数(単位数) 52.5時間(3)	配当学科・学年・時期 介護福祉専攻科・前期	必修・選択 必 修	
<p>実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性) 看護師の立場から、医療職ではない介護福祉士（取得見込み）の学生に対して、医療的ケアの意味や介護職が行う必要性・法的根拠・危険性の理解を基本として、医療職との連携と協働の方法を教授する。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい] 医療的ケアを安全・適切に実施するために必要な知識・技術を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要] ①「喀痰吸引」と「経管栄養」という行為は、医療行為であることを確実に認識する。そのために、医療行為に関係する他職種との連携の理解や、医療的ケアを行う際の利用者の尊厳の厳守・倫理観の確立を図る。 ②医療的ケアを実施するための基礎的知識として、人体の解剖・生理、感染予防について教授する。 ③「喀痰吸引」と「経管栄養」を安全かつ正確に実施できるよう、基本的な手順を学ぶ。</p> <p>[授業終了時の達成課題（到達目標）] ・医療における倫理的配慮ができる。 ・医療的ケアが必要な利用者と家族の気持ちが理解できる。 ・医療的ケア実施時の、他職種との連携の必要性が理解できる。 ・医療的ケアの実施に関する、呼吸器官・消化器官のしくみとはたらきが理解できる。 ・医療的ケアを安全に実施するための衛生管理の方法や感染予防について理解できる。 ・喀痰吸引と経管栄養について基本的順序が説明でき、手順通りに実施できる。 ・介護福祉士の役割である、報告と記録の必要性が理解できる。</p>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 ～はじめに：「医療的ケア」とは 科目の位置づけ等の説明～</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人間と社会、「医療的ケア」を学ぶ意義、「医行為」の理解と危険性の認識、医療の倫理（個人の尊厳と自立、利用者や家族の気持ちの理解、個人情報と守秘義務） 2. 保健医療制度と医行為に関する法律（医行為に関する法律、社会福祉士および介護福祉士法の改正、喀痰吸引等制度の概要、保健医療に関する制度） 3. チーム医療と介護職員との連携（医療的ケアと喀痰吸引等研修、喀痰吸引と経管栄養における、医療職と介護職の役割および連携）＊演習チェックリストを参照しながら説明 4. 安全な療養生活－①喀痰吸引や経管栄養の安全な実施、リスクマネジメント、ヒヤリハット（インシデント・アクシデント） 5. 安全な療養生活－②救急蘇生 6. 清潔保持と感染予防－①スタンダードプリコーション、職員の感染予防と体調管理、手洗いと手指消毒法および含漱 7. 清潔保持と感染予防－②感染予防対策、療養環境の清潔・消毒法、滅菌と消毒演習内容（滅菌手袋の装着方法、撮子と綿球の取り扱い方法、ガウンテクニック） 8. 健康状態の把握と観察方法－①身体面と精神面、バイタルサイン測定方法他 9. 健康状態の把握と観察方法－②バイタルサイン測定(1)呼吸・脈拍血圧・体温・意識レベル、平常時の健康状態の観察と把握 10. 健康状態の把握と観察方法－③バイタルサイン測定(2)呼吸・脈拍・血圧・体温・意識レベルの見方 				

11. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論(1):呼吸のしくみとはたらき
12. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論(2):いつもと違う呼吸と、喀痰吸引を安全に実施する方法
13. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論(3):喀痰吸引
14. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論(4):人工呼吸器と吸引(非侵襲的、侵襲的)
15. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論(5):子どもの吸引 吸引を受ける利用者や家族の気持ちと対応、説明と同意
16. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論(6):呼吸器系の感染と予防、喀痰吸引により生じる危険、事後の安全確認
17. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引実施手順－①喀痰吸引で用いる器具・器材とそのしくみ、清潔の保持
18. 高齢者および障害児・者の喀痰吸引実施手順－②吸引の技術と留意点、実施手順
19. 高齢者および障害児・者の経管栄養概論(1):消化器系のしくみとはたらき
20. 高齢者および障害児・者の経管栄養概論(2):消化・吸収とよくある消化器の症状
21. 高齢者および障害児・者の経管栄養概論(3):経管栄養と、経管栄養の種類、経管栄養実施上の留意点
22. 高齢者および障害児・者の経管栄養概論(4):子どもの経管栄養について。経管栄養に係る感染予防について。経管栄養を受ける利用者や家族の気持ちと対応、説明と同意
23. 高齢者および障害児・者の経管栄養概論(5):経管栄養により生じる危険、注入後の安全確認、急変事故発生時の対応と事前対策。
24. 高齢者および障害児・者の経管栄養実施手順－経管栄養で用いる器具・器材とそのしくみ、清潔の保持
25. 高齢者および障害児・者の経管栄養実施手順－経管栄養の技術と留意点
26. まとめと解説

[履修に当たっての留意点]

専門用語も多く難解な科目であるので、自分自身の心身の認識から理解につなげられるよう、日々健康と自分の心と体を意識して過ごすこと。講義後には復習をおこなうこと。

[使用テキスト・参考文献]

パワーポイント資料
 秋山昌江他(2019)『最新 介護福祉士養成講座 15 医療的ケア』中央法規出版
 全国訪問看護事業協会(編集)(2015)『改訂介護職員等による喀痰吸引・経管栄養研修テキスト』中央法規出版
 (資料授業中に紹介、配布)

[単位認定の方法及び基準]

筆記試験(9割以上得点で合格*科目の必須条件)
 筆記試験に合格しないと、演習を受講できない。
***上記①、②は厚生労働省の規定であり必須条件**

授 業 概 要

授業のタイトル (科目名) 医療的ケアⅡ	授業の種類 演 習	授業担当者： 山浦 あゆみ・赤田 実千代																									
授業の回数 20回	時間数(単位数) 30時間(2)	配当学年・時期 介護福祉専攻科・後期	必修・選択 必 修																								
<p>実務経験のある教員による授業科目(実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>看護師の立場から、医療職ではない介護福祉士(取得見込み)の学生に対して、医療的ケアの意味や介護職が行う必要性・法的根拠・危険性の理解を基本として、医療職との連携と協働の方法を教授する。</p>																											
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>医療的ケアを安全・適切に実施するために必要な知識・技術を習得する。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>①「喀痰吸引」と「経管栄養」という行為は、医療行為であることをシミュレーターモデルに実施することで、改めて認識する。</p> <p>②シミュレーターモデルに実施することで、医療的ケアを行う際の利用者の尊厳の厳守・倫理観の確立を図る。</p> <p>③「喀痰吸引」と「経管栄養」を安全かつ正確に実施できるよう、基本的な手順を学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「喀痰吸引」の基本的順序が説明でき、手順通りに実施できる。 ・「経管栄養」の基本的順序が説明でき、手順通りに実施できる。 ・シミュレーター(喀痰吸引および経管栄養それぞれの)を活用して、効果的に実施できる。 ・利用者(シミュレーター)に対して、必要な説明や声掛けができる。 ・利用者(シミュレーター)に対して、必要な観察ができる。 ・「喀痰吸引」と「経管栄養」を、1人で実施できる。 ・介護福祉士の役割である、報告と記録の必要性が理解でき、実施できる。 																											
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>回数</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 50%;">1. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう①</td> <td style="width: 50%;">13. 喀痰吸引：鼻腔内吸引①</td> </tr> <tr> <td>2. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう②</td> <td>14. 喀痰吸引：鼻腔内吸引②</td> </tr> <tr> <td>3. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう③</td> <td>15. 喀痰吸引：鼻腔内吸引③</td> </tr> <tr> <td>4. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう④</td> <td>16. 喀痰吸引：鼻腔内吸引④</td> </tr> <tr> <td>5. 経管栄養：経鼻経管栄養①</td> <td>17. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引①</td> </tr> <tr> <td>6. 経管栄養：経鼻経管栄養②</td> <td>18. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引②</td> </tr> <tr> <td>7. 経管栄養：経鼻経管栄養③</td> <td>19. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引③</td> </tr> <tr> <td>8. 経管栄養：経鼻経管栄養④</td> <td>20. 救急蘇生法</td> </tr> <tr> <td>9. 喀痰吸引：口腔内吸引①</td> <td></td> </tr> <tr> <td>10. 喀痰吸引：口腔内吸引②</td> <td></td> </tr> <tr> <td>11. 喀痰吸引：口腔内吸引③</td> <td></td> </tr> <tr> <td>12. 喀痰吸引：口腔内吸引④</td> <td></td> </tr> </table>				1. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう①	13. 喀痰吸引：鼻腔内吸引①	2. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう②	14. 喀痰吸引：鼻腔内吸引②	3. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう③	15. 喀痰吸引：鼻腔内吸引③	4. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう④	16. 喀痰吸引：鼻腔内吸引④	5. 経管栄養：経鼻経管栄養①	17. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引①	6. 経管栄養：経鼻経管栄養②	18. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引②	7. 経管栄養：経鼻経管栄養③	19. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引③	8. 経管栄養：経鼻経管栄養④	20. 救急蘇生法	9. 喀痰吸引：口腔内吸引①		10. 喀痰吸引：口腔内吸引②		11. 喀痰吸引：口腔内吸引③		12. 喀痰吸引：口腔内吸引④	
1. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう①	13. 喀痰吸引：鼻腔内吸引①																										
2. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう②	14. 喀痰吸引：鼻腔内吸引②																										
3. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう③	15. 喀痰吸引：鼻腔内吸引③																										
4. 経管栄養：胃ろう又は腸ろう④	16. 喀痰吸引：鼻腔内吸引④																										
5. 経管栄養：経鼻経管栄養①	17. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引①																										
6. 経管栄養：経鼻経管栄養②	18. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引②																										
7. 経管栄養：経鼻経管栄養③	19. 喀痰吸引：気管カニューレ内部の吸引③																										
8. 経管栄養：経鼻経管栄養④	20. 救急蘇生法																										
9. 喀痰吸引：口腔内吸引①																											
10. 喀痰吸引：口腔内吸引②																											
11. 喀痰吸引：口腔内吸引③																											
12. 喀痰吸引：口腔内吸引④																											
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>テーマごとに完結させる科目のため、その都度の手技の習得が不可欠であるから、真剣に臨むこと。当日合格できない場合は、補講で合格するよう努力すること。</p>																											
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>秋山昌江他 (2019)『最新 介護福祉士養成講座 15 医療的ケア』 中央法規出版</p> <p>全国訪問看護事業協会(編集)(2015)『改訂介護職員等による喀痰吸引・経管栄養研修テキスト』 中央法規出版</p> <p>(資料授業中に紹介、配布)</p>		<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施回数：①口腔内吸引＝5回以上 ②鼻腔内吸引＝5回以上 ③胃ろう又は腸ろう経管栄養＝5回以上 ④経鼻経管栄養＝5回以上 ⑤救急蘇生法＝1回以上 <p>*評価基準：・4回演習後に、5回目は読み上げや助言がない状態で、自分一人で実施できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手引きの手順通りにできる。 ・すべての項目が評価＝Aであること。 																									